



拳銃と十五の短篇

拳銃と十五の短篇

三浦哲郎

講談社

拳銃と十五の短篇

昭和五十一年九月一日 第一刷発行
昭和五十二年三月十八日 第五刷発行

著 者 三浦哲郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二／郵便番号一二二
電話東京〇三九四五―一二二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



落し本・乱丁本はお取り替えます

© Tetsuo Miura 1976, Printed in Japan

目次

拳銃	7
シュークリーム	23
河鹿	39
おおるり	53
川べり	69
石段	83
小指	97
土橋	119
鶯	131

闇

147

義妹

163

水仙

175

風

191

鼠小僧

213

たけのこ狩り

225

化粧

243

あとかき

259

裝幀
山
高
登

拳銃と十五の短篇

拳
銃

私のおふくろはもうすぐ八十三になるが、近頃、不意に背後から左の肩にずっしりと乗っかってくる目にみえない漬物石に悩まされている。

それさえなければ、齡のわりには丈夫な方で、いまでも細い絹針に独りで糸を通して針仕事はするし、家のなかの拭き掃除もする。陽氣がよくなれば盥に水を張って洗濯もするし、時には自分で庖丁を握って鱸を三枚におろしたりもするが、どういふものか八十を越したところから、うっかり日和に釣られて遠出をしたり、調子に乗って長いこと流して水仕事をしたりしたあとは、きまってその厄介な漬物石のためにひどい目に遭わされるようになった。

一と仕事終えて、やれやれと思つてゐるときに、なんの前触れもなくいきなり左の肩へずっしりと乗っかけてくるのだから、逃げるいとまもない。あ、また背負しよわされた、そう思つて振り落とそうとしても、もう落ちるものではない。ずっしりとした重みがじわじわと背中に染みひろがり、内側から胸を押し包んで、締めつけてくる。急に軀が揺れるほどの動悸がしてきて、心臓がしくしく

痛み出す。黙っているのが心細くて、「また来たえ、来たえ。」と叫ぶが、すぐに声がかすれてしまふ。

隣町にも稽古場を持って琴を教えている私の姉が、休みで家にいるときはいい。声を聞きつけて飛んできて、手を貸して寢床へ連れていつてくれる。姉がいなときは、困ってしまう。姉と二人暮らしたから、呼んでも誰もきてくれない。茶の間にいるときだと、手近の座布団を二枚並べてそこに手足を縮めて横になるが、土間や庭だと、そもいかない。背中をまるめて蹲る。蹲っているのも辛くなって、尻餅をつく。みっともないが、そのまま、やがて目にみえない誰かが背中の漬物石をそと取り除けてくれるのを待つほかはない。その誰かを待つ間の、長いことたら！ 顔に脂汗が浮いてくる。足の先が冷たくなってくる。目の前が暗くなってくる……。

おふくろは、いずれはこの漬物石に命を奪^とられることになるだろうと思っている。というのは、背中にのしかかってくる重みだけならまだしも、それが近頃では、露骨に心臓の方へ手を伸ばして握り締めようとするからである。ところが、生憎おふくろは自分の心臓に自信がない。

おふくろは、自分の心臓には若い時分の古疵がある、すくなくとも穴が六つはあいている、そう思い込んでいる。心臓に穴などあいていたのではとてもこの齢まで生きられないが、おふくろは、その六つの穴はいずれも雷に打たれたような、ちいさいが底の深い穴だといっている。

六つのうち、二つは、長女と三女を生んだときにできた穴（その二人の姉たちは、どちらも生まれつきの白っ子であった）。

別の二つは、長女と次女に死なれたときにできた穴（二人はそれぞれ違った方法で、けれどもつづけさまに自殺した）。

残りの二つは、長男と次男に家出をされたときにできた穴（その兄たちはいまだに行方がわからない）。

だから、自分の心臓は、よその人に比べて随分^{こゝろ}忒^{こゝろ}え性に乏しいのだと、おふくろはそう思い込んでいる。いずれ、そのうちに、あの漬物石が自分の心臓を手掴みにするときにくるだろう。あの力で握り締められたら、ひとたまりもない。

おふくろは、そのときのためにそろそろ死支度をはじめている。自分がいつ死んでもいいように——自分がこの世で為残したことで、あとに残った者たちへ迷惑をかけることのないように。おふくろは絶えず心にそう念じながら、すこしずつ周辺の整理を進めている。それで、なにか自分独りでは始末の判断がつかないようなものがみつかり、私宛に、『近々こつらへ来る用はないでしか。また一つ相談事があります。ちょっと寄ってくれば助かりまし』と田舎訛の手紙をよこす。

つい一と月ほど前にも、おふくろがまたしても漬物石を背負い込んだという姉からの知らせで、私はいつものように、おふくろの好物の抹茶飴を土産に一と晩泊りで郷里へ帰ってきたが、そのときもおふくろは、それが身近にあることを思い出すたびに、つい、あたりをそっと見廻さずにはいられない、陰気で物騒な持物のことで、さっそく私に相談を持ちかけてきた。

その陰気で物騒な持物というのは、一挺の古い拳銃のことだ。

その拳銃のことをいい出す前に、おふくろは、

「おまえ、つかぬことを訊くが、モデルガンって、なにせ。」

といった。

何日か前の夕方、姉が隣町の稽古場から戻ってみると、台所の流しの蔭のうす暗がり、まるでかくれんぼ遊びの鬼の番のときに置き去りにされてしまった子供のように、両手で顔を覆ったままちいさく蹲っていたというおふくろは、それでも今度の漬物石はいつもよりもいくらか軽かったとみえて、私が郷里の家に着いたときはもう床を離れて、炉端で川魚を串焼きにしていたが、いつとき私の家族の様子を尋ねたりしたあとで、唐突にそんなことをいい出したのである。

私はちよつと面喰ったが、もともととおふくろには、新聞やなかで見憶えたバタ臭い片仮名文字を、なにかの拍子にふと思ひ出しては意味を尋ねる癖があるから、いつものように簡単に、モデルガンというのは鉄砲とか拳銃の精巧な模型で、まあ大人の玩具のようなものだとか教えてやると、おふくろは、実はそのモデルガンを振り廻して大それたことをした子供がいるといつて、つい先日、近くの町に持ち上った強盗騒ぎの話をした。

その強盗犯人は、頭からナイロン・ストッキングをかぶって三軒の家に押し入り、寝ている人にモデルガンを突きつけて（勿論、はじめは誰もそれをモデルガンだとは思わなかった）金品を奪い、

四軒目の息子に組み伏せられて捕まったが、覆面を剝いてみると、これが高校を出たばかりの少年で、モデルガンは高校の修学旅行のとき東京でこっそり手に入れてきたものだったという。

私は、そんな話を聞きながら、おふくろはよほど女世帯が心細くて、それで帰ってきたばかりの自分にいきなり強盗の話などを聞かせるのだと思っていたが、そうではなかった。話の先を聞いてみると、まだ二十にもならない子供がそんな玩具を振り廻して悪事を働くような世の中だから、なにかのはずみで思わぬ間違いが起らないうちに、あれを然るべく処分して置いた方がいいと思うが、どうだろうかという相談であった。

ところが、私には、おふくろのいうあれが直ぐにはわからなかった。

「あれ、というと？」

「ほら、父さんのべすと、とるせ。」

おふくろはそういつて、ちよつと首をすくめてみせた。

私は、思い出した。おふくろが「父さんのべすと、とるせ」というのは、死んだ私の父親が形見に遺した拳銃のことである。勿論、それはモデルガンなどではなくて、六連発の弾倉が回転式になっている、三二口径の、しつとりとした重みがいかに本物らしい拳銃である。

けれども、私の父親は、生前軍人でもなかったし、やくざでもなかった。町に呉服商いのちいさな店を出している、小心で実直な田舎商人にすぎなかった。戦後、生まれ在所の村へ疎開したきりになって町の店を失ってからは、薪割りと川釣りに明け暮れて、上辺ばかりは優雅な村人にすぎな

かった。姉が琴の稽古場を持つようになってこの町へ移ってきてからは、脳軟化症を患う老人にすぎなかった。そんな父親は、生涯を通じて拳銃などには指先も触れたことがなかったように思われるのに、死んだあとには、まぎれもない、ひややかに光る拳銃が残ったのである。しかも、それと一緒に、実弾も五十発入りの箱で一つ残っていた。

私たちは、この夏、父親の十七回忌を済ませたばかりだが、思い出してみると、その拳銃も実弾も、いまだにそっくりこの家に残りつづけているわけで、おふくろの言葉を借りれば、私たちはこの十六年間で、まかり間違うと犯罪の兇器にもなりかねない物騒なものを、心ならずも隠匿していたということになる。

おふくろは、炉の灰に炭火を円く囲んで立て並べてある川魚の串を、一本ずつ抜き取っては焼け具合を確かめながら、思い出すたびに気が重くなる「父さんのべすとる」について、長い愚痴をこぼした。おふくろは、粗暴なことにはからきし意気地がないから、正直いえばそのべすとるがみつかったときから厭な気がしていたのだが、その後、本物まがいの玩具が押し込みの道具に使われたり、その玩具に悪い細工を施して人を傷ついたり、本物で撃ち合ったり殺し合ったりというような話が世間から伝わってくるたびに、その厭な気がいよいよ募って、いまではもう、亡夫の形見は承知の上でそのべすとるを呪いたいような気持になっている。

危険な銃砲や刀剣類の持主は、忘れずに警察へ申告しなければいけないという国のきまりは知っているが、生憎なことにおふくろは、どんなに自分を励まして二度と警察というところへは足を